

彙報

第九回総会および研究集会

木簡学会第九回総会と研究集会は、一九八七年二月五、六日の両日にわたって、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一三〇名の参加者をえて開催された。会場には、平城宮跡（佐紀池南辺地区）、平城京跡（左京三条二坊七坪）、藤原宮跡（五四―一次、五五次）、滋賀県宮町遺跡、福井県田名遺跡、大坂城跡出土木簡のほか、保存処理をした平城宮跡出土の木簡と削屑が展示され、関心をよんだ。

◇二月五日（土）（午後一時―五時）

第九回総会（議長 今江広道氏）

最初に平野邦雄会長の挨拶があり、岸俊男前会長・浅香年木会員、もと会員の坂本太郎氏が死去され、木簡学会の十周年記念事業として木簡図録を刊行すること、六月と一二月の委員会で二名の入会が認められて会員が二四名となり会員数が順調に伸びていること、入会申し込み書の書式を一部改めたことなどが述べられた。続いて議長に今江広道氏を選出して議事に入った。

会務・編集報告（鬼頭清明委員）

会員数は、一一名の新入会員を迎えて二四名であること、昨年、委員の改選が行なわれ、会長に平野邦雄氏、副会長に大庭脩氏・田中琢氏、監事に田中稔氏・長山泰孝氏が選出されたこと、十周年の記念出版の概要、会誌第九号の編集経過などが報告され、承認された。

会計報告（岩本次郎委員）

一九八六年度の会計報告が行なわれ、年度の収支、第九号の定価（三八〇〇円、送料四〇〇円）についての説明があり、ひき続いて田中稔監事から、長山泰孝監事と共に監査を行い、会計の執行が正当、適切に行われていることを確認した旨報告があつて、異議なく承認された。

研究集会（司会 松下正司氏）

中世の木簡について

石井 進氏

木簡の保存処理

沢田正昭氏

両氏の報告はともに本誌に掲載することができた。

研究集会終了後、グリラ友楽で懇親会がひらかれた。

◇二月六日（日）（午前九時三〇分―午後三時）

研究集会（司会 笹山晴生氏・八木充氏）

一九八七年出土の木簡

綾村 宏氏

田名遺跡出土の木簡について

田辺常博氏・館野和己氏

地方出土古代木簡の様相

鬼頭清明氏

綾村報告は、一九八七年に木簡の出土した三六遺跡について、木簡出土遺構と木簡内容の概要を報告したものである。田辺報告では、スライドをまじえて田名遺跡の説明が行われ、館野報告は、これまで出土した若狭国の貢進物付札を全て集成してその特色を指摘し、さらに今回出土した木簡は、三方郡の能登里か三方郡家で書かれたもので、現段階では、後者の可能性が大きいとした。鬼頭報告は、大和・山城以外の地方から出土している古代木簡の内容を分析し、その問題点を指摘したもので、木簡は官衙的色彩の濃い所から多く出土していて、漢字の識字層との関わりが考えられること、大形の記録簡は国府跡出土のものが少ないこと、地方出土の荷札木簡には、国名を記さず郷名から書き始められているものがあることを指摘し、木簡がどの段階で書かれたのか、貢進物がどこで使われたかを考察したものである。

それぞれの報告については、質疑討論が活発に行われ、総括討議で締めくくられた。最後に田中琢委員から閉会の辞があり、参加者への謝辞が述べられた。

委員会報告

◇一九八七年一二月五日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営、十周年記念事業等について検討が行われた。

◇一九八八年六月一日(水)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八七年度の会計報告、『木簡研究』一〇号の編集計画、『古代木簡集成』(仮題)出版に対して特別予算を組むこと、幹事を追加することなどが論議された。同日、会計監査も行われた。

◇一九八八年一〇月二日(金)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八八年度前半の会計中間報告、研究集会の内容の検討を行い、『古代木簡集成』の編集状況について報告があった。